静岡県立大学附属図書館

シリーズ　私の一冊の本

国際関係学部　　奈倉京子　先生

中根千枝著『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』

閲覧室1階　文庫・新書コーナー　現新/105
閲覧室2階　　361.3/N38　　講談社　出版

私がこの本に出会ったのは、高校一年生の時でした。現代国語の期末試験の副読本として指定され読み始めましたが、当時は提示された鍵となる抽象度の高い概念を現実と突き合わせて考えることができず、消化不良でページを閉じた記憶しかありませんでした。ところが大学で文化人類学のゼミに入ると、人類学の書籍として指導教員に勧められ、再びページを開くこととなりました。そして現在、担当している「中国社会論」の授業で、中国の「差序格局」的人間関係・社会構造との比較の観点から、本書の内容を紹介し、日中間の人間関係の築き方や組織（大学のサークル、部活、企業等）におけるリーダーシップの相違について、毎年、受講生とディスカッションをしています。とても縁のある本の一冊です。

本書は社会人類学者の中根千枝が、インド、中国、イギリス、アメリカの社会と比較しながら、「単一社会の理論」により日本の社会構造の本質を捉えようとしています。まず、「資格」（生まれながらに個人に備わっている氏・素性、生後個人が獲得した学歴・地位・職業等）と「場」（一定の地域、所属機関等）の概念を提示し、日本人は「場」を強調すると述べています。そのため「家」（家族・親族の意味に加え、集団の枠を比喩的に表現している）集団内における人間関係が優先され、これが雇用関係にも影響していると分析しています。従って、「日本の企業の社会集団としての特色は、それ自体が『家族的』であることと、従業員の私生活に及ぶという二点にある」と指摘しています。このような家族的一体感や情的結びつきによって養成される「枠」の強さにより、「ウチ」、「ヨソ」の意識が強くなり、日本社会の中では複数の場へ所属することが不可能となると述べています。

次に、「タテ」、「ヨコ」の関係について考察しています。日本は「タテ」組織であり、これは「場」による集団の孤立性が導いた特性であると解釈されています。従って本書のタイトルにもなっている「タテ社会」は、上述した「場」のメカニズムを基礎に成り立っている点を理解することが重要です。この原理に基づき、更に筆者は、「タテ社会」における「ワン・セット主義」や派閥争いを生み出すメカニズム、リーダーと集団の関係についても論を進めています。

本書は一九六七年に出版された本ですが、五十年近く経過した現代の日本社会にも通じる普遍性のある日本社会論、日本人論の内容だと言えます。しかし一方で、グローバル化に伴う世界経済（経営）の連携が促進される中で、「ワン・セット主義」のみでは生産が成り立たない状況もあるでしょうし、人が複数の場に所属しにくい「単一社会」では、人と人とのつながりも単調化し、イノベーションを生み出す可能性も低くなります。このように本書を「仮想敵」として現在進行形で起きている情況と突き合わせてみると、日本社会の変化や問題点が見えてきます。

また、他の国の社会構造との比較研究にとっても本書は有効です。私が研究対象としている中国における人間関係は、人が環境や状況に応じて、自己を中心に各種の関係が臨機応変に取り結ばれる「差序格局」的構築を特徴としており、「枠」の境界線が曖昧なため、個人が複数の集団と関係を持つことができます。このような関係は自由かつ柔軟で伸縮可能であるという長所がある一方、不安定で壊れやすいという短所もあります。このように本書は、学生の皆さんが興味のある国、携わってきた国、勉強してきた国、これから就職する企業と関係の深い国等の社会に内在された基本原理を見るための有効なモノサシ、指針を与えてくれます。